令和５年度「川崎医療短期大学の教育・学生生活に関するアンケート（卒業後アンケート）」調査結果

Ⅰ．調査時期、対象者、調査方法、回収結果

調査時期：令和５年８月

対 象 者：平成 29 年度看護科・医療介護福祉科卒業生、令和４年度看護学科卒業生

調査方法：Google フォームを用いたオンラインアンケート調査。対象者に URL と QR コードを印刷したはがきを送付

回収結果：

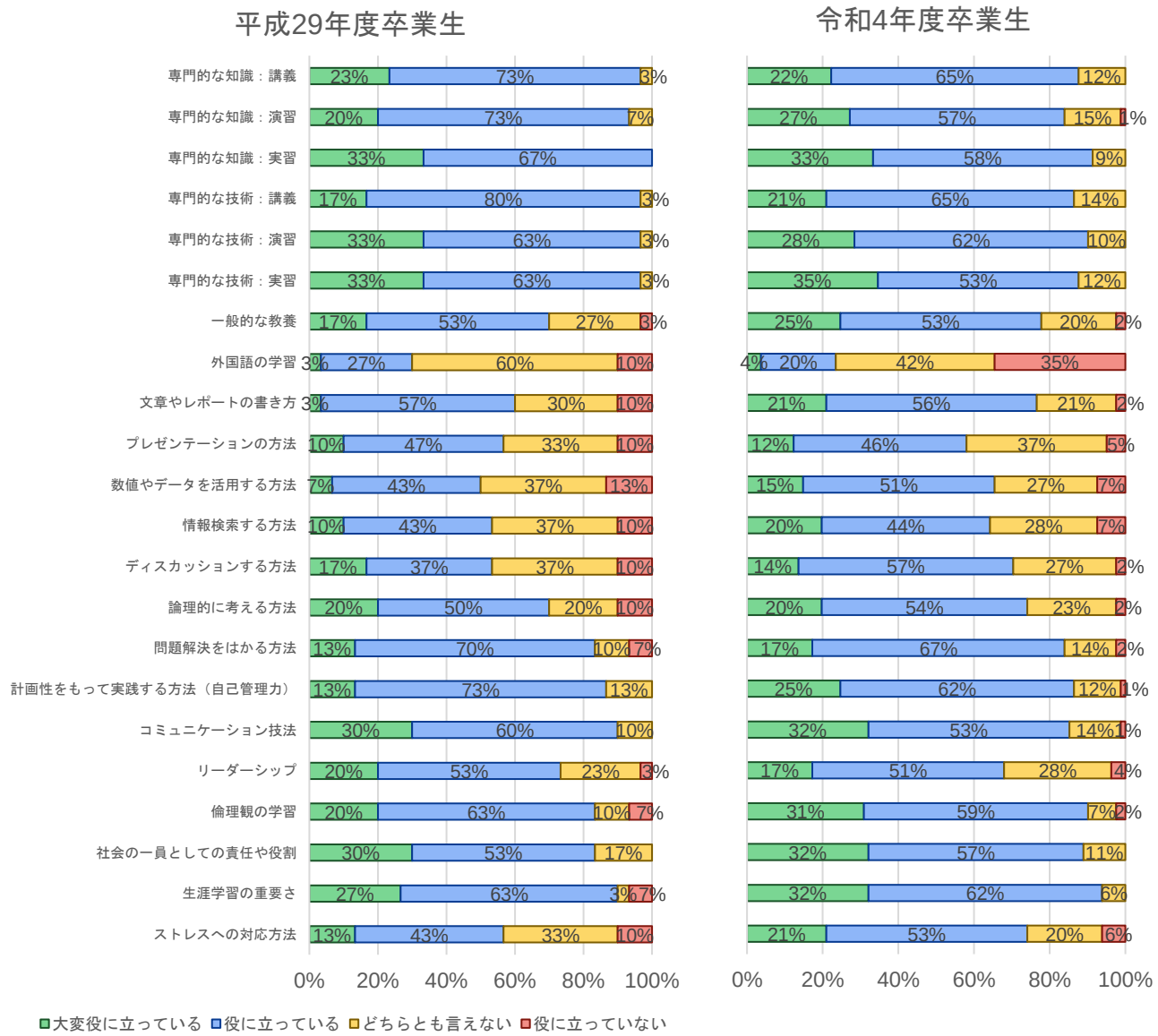
			対象者数		回収数		回収率		回収者の卒業した年の４月時点進路					
									就職		進学		その他	
総計			274		111		40.5%		106		3		2	
内訳	平成 29 年度	看護科	155	133	30	23	19.4%	17.3%	27	21	2	1	1	1
		医療介護福祉科		22		7		31.8%		6		1		0
	令和４年度（看護学科のみ）		119		81		68.1%		79		1		1	

Ⅱ．アンケート結果

平成 29 年度卒業生と令和４年度卒業生に分けて集計した。

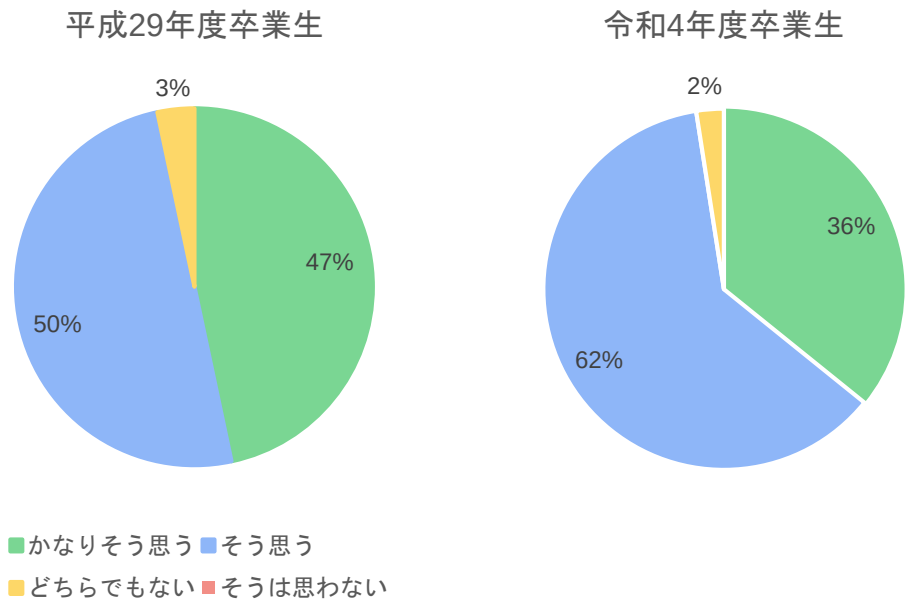
自由記述に関しては、医療介護福祉科のもののみ（医療介護福祉科）と示す。回答の後ろの（）は件数、()がないものは全て１件。

1. 在学中の教育について（次に示す教育は現在役に立っているか）



在学中の教育について気になった点（自由記述）：
平成 29 年度卒業生
・　気になったことはない。
令和４年度卒業生
・　実技の経験、実物に触れる経験がもっとあればよいと思った。
・　手書きのレポートに関して、書くことに時間がかかるものが多く、PC で打ち込むほうが時間短縮になると感じた。書く時間を他の学習時間に当てることで学習の習熟につながると思った。ただ、図やグラフなどは手書きのほうが理解が深まりやすいと思う。

2-1. 本学の学びの評価（本学で学んでよかったと思うか）

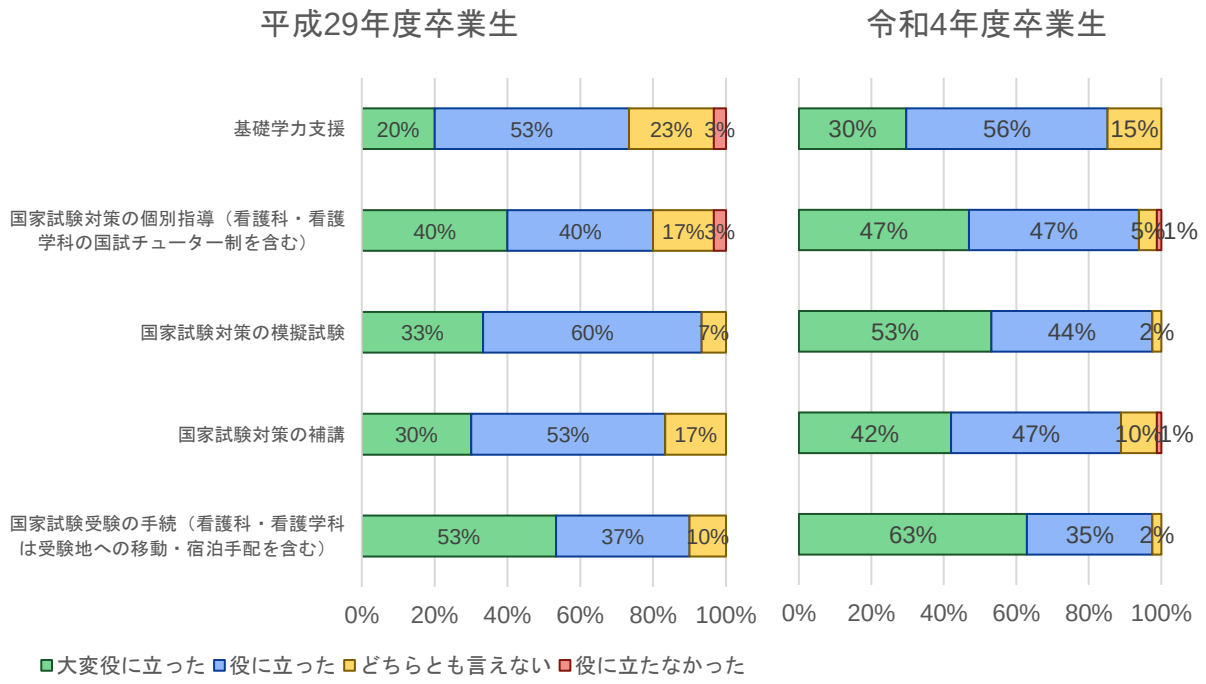


本学の学びの評価について、そのように思う理由（自由記述）
平成 29 年度卒業生
・　３年間で必要なことを学ぶことができる。(3)
・　附属病院があるので実習で遠くに行く必要がなく負担が少ない。(2)
・　学費が安く済む。
・　川崎医科大系列に就職するなら奨学金がある。
・　職場には医療短大出身の方が多く共通の話題になり嬉しかった。
・　中庄駅からでも通いやすかったが、岡山キャンパスだともっとよいと思う。
・　教育がしっかりしている。
・　部活動やサークル活動で他科とも交流できる。
・　本気で向き合ってくれる先生がいた。
・　学生寮での生活でみんなと協力しながら講義や実習、テスト、国試を乗り越えることができた。
・　（医療介護福祉科）実習、実技の指導が手厚く、環境が整っている。
令和４年度卒業生
・　国試対策がよかった。(3)
・　川崎学園に就職すると卒業しても実習などで先生を見かけるため、少し安心して働ける。(5)
・　国試に向けて支援が手厚い。(4)
・　附属病院で、最新で高度な技術や知識を身につけることができた。(4)
・　就活支援や国試対策が手厚くなされている。(3)
・　職場が実習先の病院であるのがよい。設備や場所に慣れている。(2)
・　看護知識や技術に限らず、人としても成長することができたのでこの大学で学べてよかったと思う。
・　短期大学であるため、３年で臨床に出て経験を積める。
・　先生方が一生懸命に自分のことように考えてくれていた。

・　解剖生理の授業がわかりやすくてよかった。
・　今が楽しいから進んだ道は間違ってなかったのかなと思う。

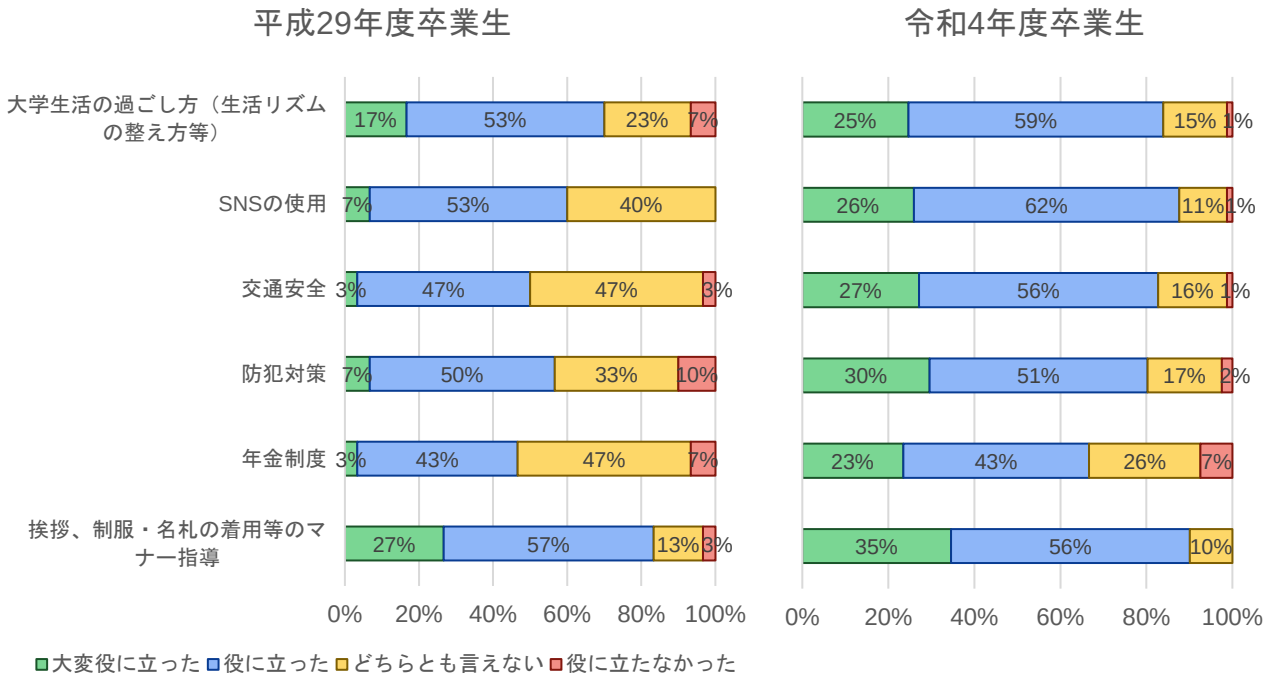
2-2. 本学でほかに学びたかったこと（自由記述）
平成 29 年度卒業生
・　母性だけではなくほかの救急外来、外科、内科、ICU も夜間実習で回ってみたかった。
・　（医療介護福祉科）医療を学びたかった。
令和 4 年度卒業生
・　職場で使う頻度が高い看護技術をより多く実践できたらもっと良かった。(6)
・　看護師になってからの情報の取り方が学べると将来生かせると思った。

3. 在学中の教育支援について（次に示す教育支援は役に立ったか）



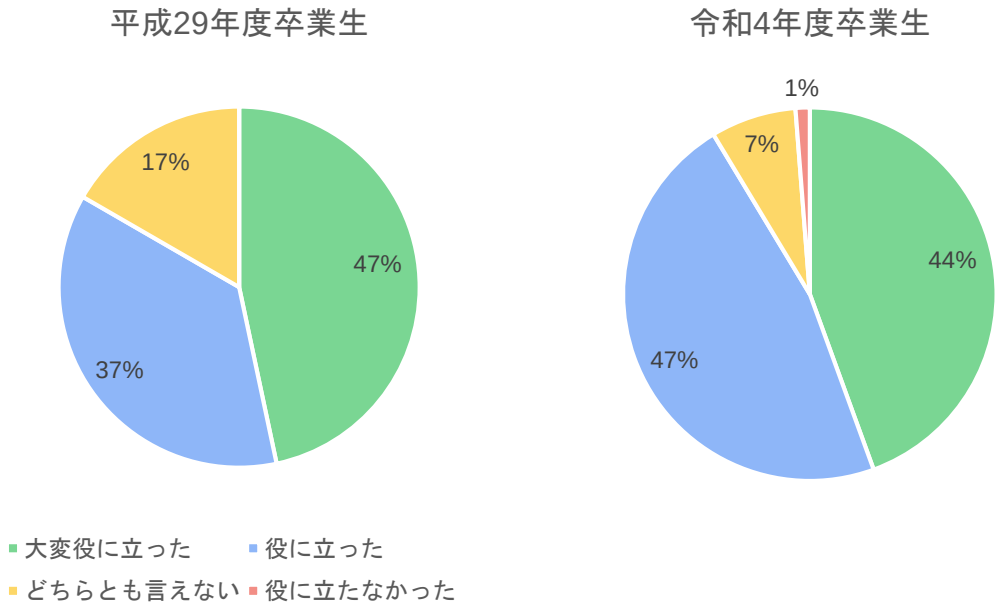
在学中の教育支援について気になった点（自由記述）
平成 29 年度卒業生
・　チューターは相性の善し悪しがある。
令和 4 年度卒業生
・　先生が相談にのってくださったことに感謝している。
・　学生の呼び出しに工夫が必要。

4. 在学中の学生生活支援について（次に示す学生生活に関する指導は役に立ったか）



在学中の学生生活支援について気になった点（自由記述）
平成 29 年度卒業生：回答なし
令和 4 年度卒業生
・　在学中、制服の着用・髪色等の制限に窮屈さを感じた。

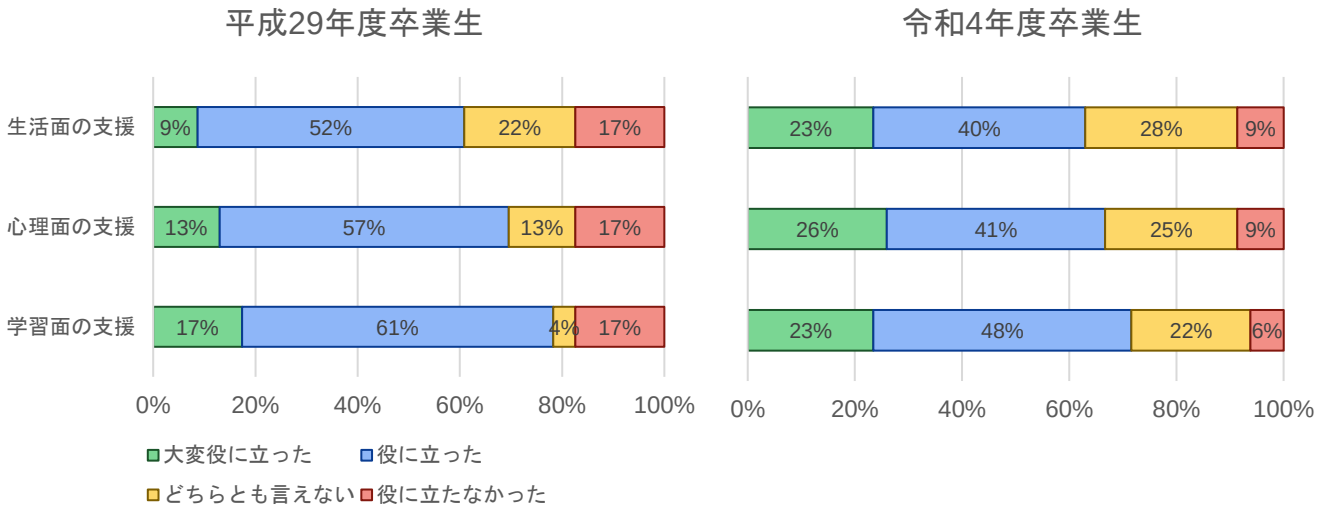
5. 担任制度について（担任による支援は役に立ったか）



担任制度に対する意見（自由記述）
平成 29 年度卒業生
・　担任の先生が毎年変わって落ち着かなかった。
・　いろいろとお世話になり、とても感謝している。
・　（医療介護福祉科）担任がとても良かった。

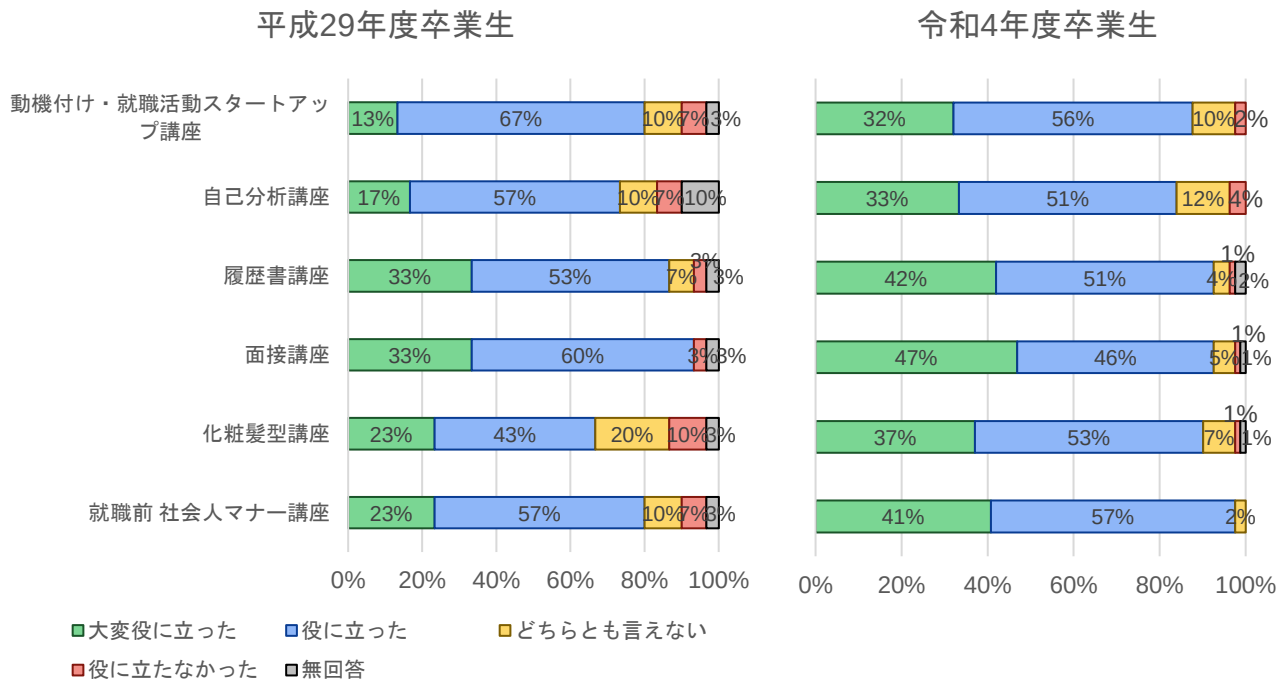
令和４年度卒業生
・　親身になって考えてくれた。(3)
・　面接練習の時間を設け練習を行ってくださった。
・　もっと寄り添ってほしい時があった。

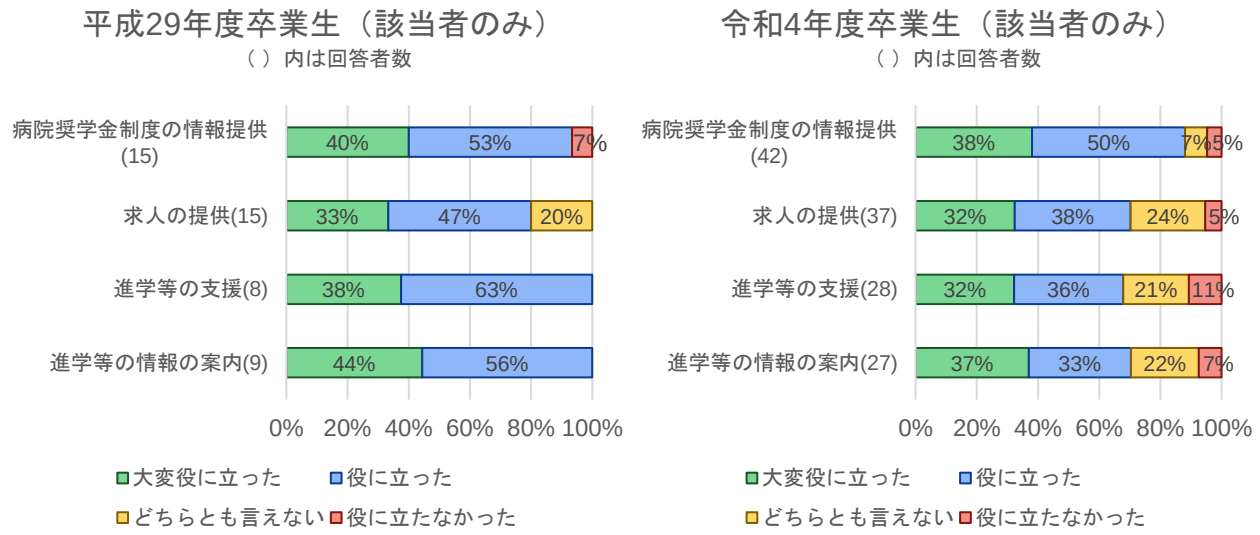
6.1 年生のアドバイザー制度（看護科・看護学科のみ）について（アドバイザーによる支援は役に立ったか）



アドバイザー制度に対する意見（自由記述）
平成 29 年度卒業生：回答なし
令和４年度卒業生
・　コロナ禍だったからかもしれないがもう少し話せる機会があればよかった。
・　結局あまり関わる機会がなくほとんど記憶に残っていないが、そのような制度があることは不安要素を取り除ける一つの制度なのでよいと思う。

7. 就職・進学支援等について（次に示す支援は役に立ったか）





就職・進学支援等について気になった点（自由記述）

平成 29 年度卒業生

- 附属病院への就職が半数以上いるため、それ以外の病院情報が少ない。特に関東方面が少ない。教員もアドバイスできる方が少なかった。
- （医療介護福祉科）岡山県外の求人がもっとあればよかった。

令和４年度卒業生

- 集団面接練習の回数を増やしてほしい。
- 実習と被ってしんどかった。
- 就活前に色んな病院を見に行くことをおすすめしたい。

8.在学中にできなかったことで、学生時代にしてみたかったこと（自由記述）
平成 29 年度卒業生
・　旅行(2)
・　アルバイト
・　（医療介護福祉科）サークル活動・アルバイト・一人暮らし
令和４年度卒業生
・　学園祭
・　旅行
・　留学
・　香川での研修
・　他のクラスの人との交流
・　資格の取得、学年を超えてのディスカッションや勉強の教え合い
・　勉強と息抜きの工夫。病院見学にもっと行って刺激をもらえば良かった。
・　手術室・ICU・SCU などでの実習
・　実際に採血する・点滴の溶解

9. 在学中になかったことで、あればよかったと感じている支援（自由記述）
平成 29 年度卒業生：回答なし
令和４年度卒業生
・　学年を超えて小グループなどを作って勉強することによる新しい知識や知らない知識の習得
・　他のクラス、学年との関わり
・　医療短大が岡山市内に移動したので、川崎学園での活動(学園祭など)で、他学科や学園内の学生との交流が増えればよいと思う。
・　方言を教えてほしかった。高齢者の患者さんの方言がわからない時が割とあった。
・　トイレの座面が暖かいほうがよい。図書室の席を増やしてほしい。

まとめ

看護科・医療介護福祉科の平成 29 年度卒業生と令和４年度卒業生（看護学科のみ、医療介護福祉学科は３年制課程への移行期のため卒業生はいなかった）を対象に、本学の教育並びに学生生活支援の有用性についてアンケート調査を行い、調査項目それぞれを卒業年度ごとに集計した。

教育・教育支援の有用性について：平成 29 年度卒業生は、専門分野を 93%～100%が評価した。一般的な教養を評価した割合は 70%、外国語学習は 30%、教育活動全般を通して涵養される能力は、レポートの書き方やプレゼンテーション、情報処理、ディスカッション、論理性、リーダーシップ、ストレスへの対応方法は 50%～73%であったが、それ以外は 80%以上といずれも高く、とりわけコミュニケーション技法と生涯学習の重要さは 90%が評価した。令和 4 年度卒業生は、専門分野を評価した割合は 84～91%と高く、一般的な教養は 78%であったものの、外国語学習は 24%と低かった。プレゼンテーション、情報処理、リーダーシップはやや低かったが、ほかの項目に対する評価は 71%～94%と高かった。両年度を比較すると、平成 29 年度卒業生のほうが専門分野の評価が高く、専門分野以外の項目では、外国語学習とリーダーシップ、コミュニケーション技法を除いて、令和４年度卒業生のほうが評価が高かった。

国家試験対策をはじめとする教育支援についても、令和４年度卒業生のほうが評価が高かったが、両年度共に約 80%以上がその有用性を実感し、ほぼ 100%が本学で学んでよかったと回答した。一方で、より実践的な知識や技術を学びたかったと答えた卒業生もいた。社会の一員としての責任や役割を自覚して入職した卒業生は、現場で経験を積む過程で、本学の専門教育の有用性を強く実感しているものと思われる。図示していないが、平成 29 年度の医療介護福祉科卒業生はリーダーシップが 86%と高かっ

たことから、５年の間にリーダーとしての業務を任されているところまでキャリアアップしたものと思われる。

学生生活支援（含就職・進学支援）の有用性について：在学中の学生生活支援については、平成 29 年度卒業生ではマナー指導を評価した割合は 84%と高かったものの、それ以外は 46～70%であった。令和４年度卒業生では年金制度を評価した割合は 66%と低かったが、それ以外は 81～92%が評価した。平成 29 年度卒業生の評価が低かった項目については、在学中に指導があったことやその内容を忘れてきているのかもしれない。担任制度については両年度共に約 85%以上の高評価であり、看護（学）科１年生のアドバイザー制度については両年度共に 61～78%が評価した。アドバイザー制度については、コロナ禍により面談や指導が十分にできなかったことを指摘する記述もあり、コロナ禍前の平成 29 年度卒業生に比べてコロナ禍の中の令和４年度卒業生は評価が若干低かった。

就職支援に対する評価についても学生生活支援と同じような傾向にあり、平成 29 年度卒業生より令和４年度の卒業生のほうが評価が高かったが、令和４年度卒業生は、求人の提供や進学等の支援に対する評価が低かった。令和４年度卒業生は学生生活の期間がコロナ禍と重なっており、大学で就職情報を探すことや施設訪問に制限が多かったことも、評価が低い傾向につながった可能性がある。在学中にできなかったことに関する自由記述において、学年や学科、大学を越えた同世代との交流を望んでいたのも令和４年度卒業生であった。

以上のように、今回対象となった卒業生は、本学での学びの有用性を十分に実感し、就職にも満足しているものと推察される。また、倫理観や責任感、生涯学習、マナーなどの回答から、医療福祉の専門職としての自覚もできていることがうかがえる。今後の課題として、「人間（ひと）をつくる」「体をつくる」「医療福祉学をきわめる」という大学の理念の実現のための継続的かつ系統的な指導・支援の重要性、臨地実習の時期と重なる就職活動支援を計画的に行うなど手厚い支援の必要性が示唆された。